エッセイ

4年に一度の楽しみ

SCE・Net　弓削耕

E-39

発行日
2012. 8. 24

暑さの中、寝不足と熱中症と戦いながらも、世界の一流選手のスピードと技を楽しんだ第30回のオリンピック・ロンドン大会もレスリング米満選手の金メダルで終わりました。

ロンドンで開かれるのは3回目で1948年の前回からも64年の歳月が経っています。前回は大戦直後でドイツと日本は参加できませんでした。丁度、フジヤマのトビウオ、水泳の古橋選手の絶頂期で参加できれば金メダル間違いなしであったのに大変残念に思ったことがありました。4年後のヘルシンキ大会では流石の古橋選手もピークを過ぎ、決勝のレースでプールの端のコースを最後の方から泳いでいたのをニュース映画で見て非常に悲しい思いをしました。今回の北島選手と重なりあって見える光景でした。

大会の滑り出しの柔道で成績が伸びず、前途多難でしたが、後から思わぬ競技で奮闘を重ね、メダル数では最高の成績であったとかで面目を保ちました。今回は金メダル（7）の数よりも銅メダルの数（17）が多いのが特徴で、それに銀メダル（14）が次ぎました。「銅」という字は金偏に同じと書くので、金と同じであるし、「銀」は金偏に「良？」と書くので金よりも良いという人もありますが、やはり「金」とは100分の幾つかの差はあるのでしょう。スピード競争で0.1とか0.2秒の差では、無理矢理に差をつけているような気がします。特に体操とかシンクロとかいう審判の主観が入る採点競技では、何故0.1とか0.2点の差があるか観客にはあまり納得できません。銅メダルでも世界で第3位ですから立派なものですし、金メダルと能力的な差は少ないでしょうが、その後の世間の評価は大きく違います。3位と4位の差はもっと大きいでしょう。少しの差が大きな差に繋がるのはどの社会でも見られることで、運があるかないかは人生を大きく左右しますが、精一杯努力した本人には何ともし難いところもあります。

日本の金メダルを見ると女子4、男子3で女性優位です。まず三宅選手が女子重量挙げで銀メダルを取ったところから女子の勢いが始まりました。大の男が数人かかっても歯が立たない重量を1人で持上げるのですからたいしたものです。全体では女子17（銀6、銅7）に対して男子21（銀8、銅10）で辛うじて男子の面目を保ちました。世界的にも女性の躍進は目覚しいようで、近年はアラブ諸国からの女性の参加もあるので、スポーツ界での女子力は益々強くなることでしょう。草食系男子とか揶揄されないように男子ももっと力強く生きてもらいたいものです。

前回の日本を盛り上げたのを女子ソフトボールとすれば、今回はなんといっても「なでしこジャパン」でしょう。昨年のワールドカップに続き日本を一体化した力があり、オリンピックへの興味を一段と増したように思います。体力では圧倒的な差があり、実力でも及びがたいところのあるチームを相手に、日本得意のパス回しを中心とした攻撃力と捨て身の守備力を発揮するチーム力で決勝戦まで戦ったのは立派でした。最後は今一歩のとこ

ろで力及ばず残念な結果でしたが、表彰式での清々しさは見事でした。イエローカードも１つしかなく、数倍以上貰っている他チームに比べ、いつもながらのフェアプレーは誇りに思って良いでしょう。

日本が獲得したメダルの中には、初めてというのと久し振りというのが目立ちました。女子卓球団体、男子フェンシング団体、バトミントン女子ダブルス、アーチェリー女子団体、女子重量挙げなど、永年地道な努力精進を続けてきたことが報われた晴れ晴れしい成果でした。卓球の福原愛選手などは小さい頃から、いつも涙顔しか見られないようでしたが、今回初めて明るい笑顔を見たような気がします。

何年ぶりというのには、女子バレー、男子ボクシング、男子レスリング、男子体操個人総合がありました。女子バレーは東京オリンピックの頃は強かったですが、その後、出る杭は打たれるでルールを替えられたり、他チームも強化を進め、身長差などの体格では負けるので技で勝負する日本は勝利から遠ざかっていました。最近はデータ重視で、監督がスマホ片手に作戦を立てるようになり功を奏するようになりました。そのうちこの手法も何らかの制限ができるでしょう。28 年ぶりといってもまだ銅メダルです。今回の結果に甘んじることなく、更に成果を上げていって欲しいものです。

ボクシングは 48 年ぶり、レスリング、体操個人総合は 28 年ぶりの金メダルということです。ボクシングはともかく、レスリング、体操はかっては日本のお家芸であったので、今後の一層の奮起を期待したいと思います。

よく日本チームのチームワークの良さ、絆の強さを言われますが、今大会でもその特徴を生かしたチームが良い成果を出したようです。その筆頭は「なでしこ」チームでしょう。キャプテン宮間選手のチームをまとめる力は素晴らしく、それを盛り立てて行くチームメートも立派です。選手を思いやる心があり、それでいて厳しさがあり、チームを目標に向かってリードして行く指導力は、組織として成果を上げたい企業などは大いに学ぶべきところがあるでしょう。

アーチェリーやフェンシングや卓球は団体でも、1 人 1 人が別々に戦っていきますが、メンバーが気を合わせ、お互いカバーし合って行かないと、目標は達成されないでしょう。試合後の感想を聞くと、全員が一丸となって試合を進めていたことが良く分かります。

水泳のメドレーリレーも 1 人 1 人が個別に力を出し合った結果の積み重ねですが、男子メドレーでは北島選手に何とかメダルを取らせようと皆の気持ちが一つになった結果で非常に心温かいものを感じました。水泳陣が多くのメダルを取れたのも、松田・寺川キャプテンが中心になって、心を一つにして応援しあった結果だといわれます。個人競技でもチームとして力を合わせることの意義を強く感じました。組織でも、あのリーダーを男にしてやろうと頑張ると思った以上の成果を上げることがあります。

一方で柔道はチームとしての元気もなかったような気がします。個人の力に頼りきって事業を進めている企業が成果を上げられなかった様子を連想させます。柔道は東京大会以降、オリンﾋﾟックを始めとして世界的な競技になりました。しかし最近の競技を見ている

と日本古来の武道の精神は失われ、レスリングに近い単なる格闘技になってしまった気がします。それに審判もお粗末で、一生懸命試合をしている選手の気を削ぐのも甚だしいものがありました。柔道の技は日本発ですが、世界に出て力優勢の競技になると柔道の心は失われ、日本の優位は薄れていきます。日本からの技術で勝負していた事業が、技術が世界共通になり、事業力で押されて不利を強いられている日本の製造業、特に電気産業などとダブって見えて仕方ありません。もしも今の世界の柔道で勝って行きたいならば、女子の松本選手のような闘争心、研究心、生き抜く力が必要でしょう。松本選手のような生き方はグローバル社会で生き抜く企業の参考にもなることでしょう。

オリンピックでは 1 回でも勝つのは大変な偉業ですが、これを何回も続けるのはさらに驚異的なことです。2 連覇で最低でも 5 年、3 連覇で 9 年は最高の実力をも持ちつづけねばならないので、才能だけでなく、人一倍の努力や運も必要です。団体でも立派ですが、個人ではさらに素晴らしいものです。今回では、陸上競技のボルト選手の３冠２連覇、女子レスリングの伊調、吉田選手の３連覇が光り、強く印象に残りました。サッカー女子アメリカも３連覇の強豪でした。

日本が新しい種目に成果を上げるようになったのには、国立スポーツ科学センター（JISS）やナショナルトレーニングセンター（NTC）を作り、そこで集中的に訓練をさせ、科学的にも分析していることが大きく寄与しているようです。日本が成果を上げるには、力やスピードではどうしても叶わないので、小さな身体でも知恵や小技を使い、人並み以上の努力をし、チームワークを生かして成果を上げる道を選んでいくのが適策でしょう。陸上では徒競走、水泳では自由形では歯が立たないし、格闘技でも重量を増すと力負けします。日本人は日本人らしい得意の技術や器用さを生かせる方法を考えていくべきでしょう。日本が成功すると直ぐに真似されたり、制約ができますが、それをさらに打ち破って前に進む工夫と負けん気が必要です。技術や企業の世界でも同じようなことが言えるでしょう。これらの戦術を練り、選手を鍛えていく場が科学センターやトレーニングセンターでしょう。これらのセンターは 10 年ほど前から設立され、年間何十億円もの資金を投じているそうです。オリンピックとなると、各国とも国威発揚の場として、力を入れています。強化資金も日本の何倍も使っている国が幾つもあります。過度な競争になると問題ですが、軍備増強に使うよりは、このような競争の方がよほど増しなことになります。オリンピックは戦争をさておいての争いですからフェアな争いはどんどん行ったら良いと思います。しかし、この間に政治問題を持ち込んだ者もあり、極めて遺憾なことでした。

審判のお粗末さの目だった大会でもありました。判定が暫くすると全く逆になったり、明らかなファールを見落としたりの失態が多かったようです。審判の詰まらぬミスで判定を間違えられ永年の努力が水泡に帰しては、選手は泣くに泣けません。折角、世界一の技を競うのであるから、事前に審判のオリンピックも行って、メダルの取れる人だけを審判に選ぶようにしたらどうでしょう。1 秒の何分の 1 かの時間での技を判定しなければならないので、眼力だけでなく機械の力に依存しなければなりません。したがって、その範囲内

で判定できる競技に限定していくのが良いでしょう。シンクロや新体操など主観が入るものは美の世界に属するものであり、力とスピードを競う大会からは除外し、別の場を設けて点数をつけずに世界中で楽しむのが良いでしょう。その中で体操競技も主観の入りやすい競技ですが、第 1 回から行われているので許容することとしても良いでしょう。

そうすれば、競技数も減って簡素で充実した大会になることでしょう。開会式や閉会式も、その国の歴史や音楽をアレンジした価値あるものだという評価もありますが、いつも開催国の宣伝が前面にでるので、大部分の人には退屈なものではないでしょうか。閉会式はともかく、開会式で長時間待たされるのは選手のコンディションを狂わせるもので、多くの選手が欠席し、役員が大部分の行進ということになるのでしょう。

世界の色々なことが分かり、地理や歴史の勉強を片手に、大いに楽しむことが出来た 17 日間でした。世界一流の選手、特に日本の選手たちの活躍で、希望と元気、勇気と楽しみを沢山貰いました。この間にも世界では殺し合いは続いていましたが、多くの人が平和裡に世界の大運動会を堪能したことでしょう。4 年後のリオでまた、素晴らしいドラマが見られることを祈っています。選手の皆さん、関係者の皆さん本当にご苦労様でした。

ここまで書いたところで、銀座でメダリスト達の凱旋パレードが行われました。集まった人は 50 万人とか、銀座通りが立錐の余地のないほどに人で埋まったのに驚きました。選手たちのにこやかな顔と熱狂するファンとの交流、久し振りに明るいニュースでした。同じ集会でも、何処かの場所の何かの集まりとは随分と差のあることが分かります。

（ © 弓削耕 2012.8.20 ）